

日本ラカン協会第14回ワークショップ

フロイト＝ラカンによる「うつ」

日時：2012年10月28日（日） 14:00～18:00

場所：専修大学神田校舎7号館784教室(8F)

(〒101-8425 東京都千代田区神田神保町3-8)

参加費：無料

昨年より協会の秋のワークショップと大会シンポジウムでは、一つの共通テーマを設定し議論を重ねることでその深化をはかるというかたちを試みていますが、昨年の「死の欲動」につづいて今年は「うつ」の問題を取り上げることになりました。12月の大会シンポジウム『哀しみ』を取りもどす—喪・メランコリー・抑うつ—を控え、今回ワークショップでは、「うつ」の現象へのフロイト＝ラカンのアプローチを考えるにあたって重要な二つの観点—「うつ」をめぐる議論がそもそも持っている歴史的深度と、「うつ」の「情動」としての側面—からのお話をうかがった上で、「うつ」の現象の精神分析的理解の可能性を探ってゆきたいと思います。

司会：原和之（東京大学）

フロイトのうつ病論

—Aktualneurose をめぐって—

松本卓也（自治医科大学精神医学教室）

「うつ病」という概念が現代ほど混乱している時代はないと言っても過言ではない。新聞やテレビでこの言葉を聞かない日はないし、「抑うつ」を主訴に精神科を受診する患者数はどんどん増えてきている。しかし、フロイトのうつ病論として知られる「喪とメランコリー」は、「メランコリー」（妄想を伴う重症の精神病性うつ病）を対象としており、昨今問題となっているような「うつ病」に関してはそれほど多くのことを教えてはくれない。だとすれば、私たちはフロイトの著作のなかから、もう一つのうつ病論を取り出すことが必要なのではないか。本発表では、よく知られた「メランコリー論」では必ずしもない、フロイトの「うつ病論」を取り出し、両者をめぐる理論的変遷と鑑別診断を定式化してみたい。そのために、私たちはフロイトの1890年代の現勢神経症 (Aktualneurose) 論から、ラカンの1970年代の議論までをたどることになるだろう。

情動の「居心地悪さ」
—主体のよるべなさ現代における「うつ」—

河野一紀（医療法人 竹村診療所）

情動はしばしば圧倒的で抗い難い影響力をもって心身に作用するが、ここから情動は我々の体験における確固とした参照点であるかのような印象を受ける。今日における「うつ」の蔓延と臨床におけるその前景化、あるいは様々な領域における情動への関心の高まりは、情動に想定される体験との直接性をその根拠としているようである。しかし、こういったナイーヴな想定とは反対に、フロイト＝ラカンの精神分析において情動とは、不安を例外とすれば、抑圧を蒙らないが、ある表象から別の表象へと置換され、その原因に関して主体を欺くと考えられてきた。ラカンは、フロイトにおける表象と情動の対比をもとに、情動を享樂の残滓としての対象 a との関連から検討し、さらに剰余享樂の追求へと主体を追いやる現代のディスクールが主体にもたらす影響を指摘している。本発表では、これらの議論を踏まえ、臨床例も参照しつつ、情動や現代における「うつ」についての理論的、臨床的考察を深めたい。

各提題のあとに質疑応答の機会を設け、最後に提題者およびフロアの間での議論の時間をとる予定です。